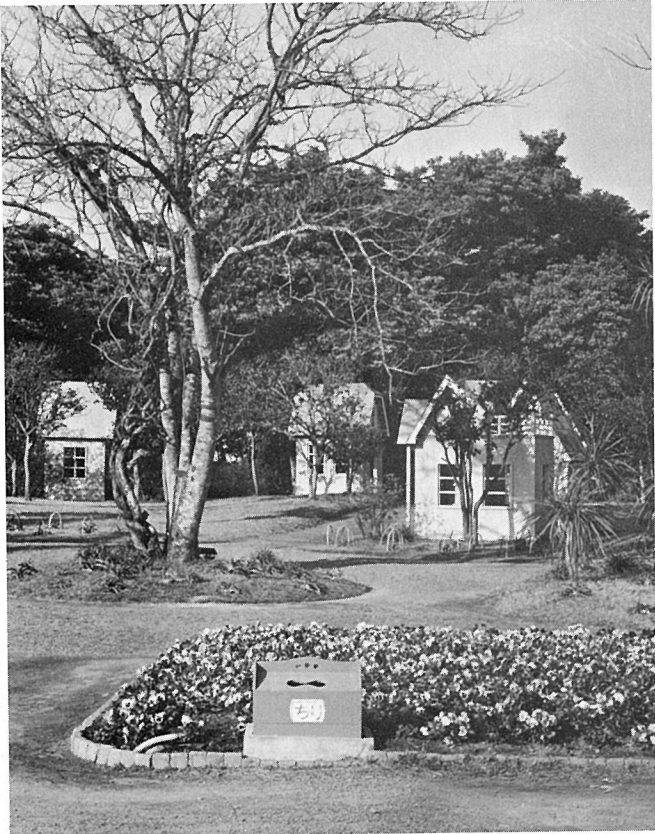




47 子どものくに

大地に絵を描く

岩切章太郎氏の修景デザイン・ポリシー

日向の大地をキャンパスとして、その上に美しい絵を描いてみたいというのが、岩切氏の年来の願いであり、祈りであった。宮崎のシンボルとしての橋公園をはじめ、こどものくに、堀切峠、サボテン公園とつらなる修景の中に天下の青島が生まれ日南海岸の美しさを生み出しているのは岩切氏のすぐれた修景デザイン・ポリシーにもとづくものであり、さらにえびの高原の美しさは、えびのブームをまき起すほどで一営利会社宮崎交通の立場をこえた、岩切氏の「大地に絵を描く」祈りのあらわれである。

岩切式手法一 “植え足し” と “切り出し”
修景デザインに岩切氏が用いた手法に二つある。一つは“植え足し”で、もう一つは“切り出し”である。

“植え足し”の見本は、日南海岸の堀切峠である。青島からずっと山道を通ってくると、ぱっと海が開けてくる。そこにフェニックスがずっと植えてある。それが実に美事である。このような日本中どこでもある景色に植え足しをしてフェニックスの葉陰から太平洋を見せるということによって、堀切峠を宮崎の観光の一拠点にすることができたのである。



48 子どものくに

そのほか、コパノセンナを植え、浜木綿を植え、龍舌蘭を植え、その他いろんな植物を植え足して日南海岸のユニークな景観をつくり出している。
“切り出し”の見本は、えびの高原である。えびの高原の、赤松千本原の赤松林は、日本で最も美しい赤松の林である。そこは初めは雑木が一杯茂っていてよく見えなかったところであるが、邪魔になる雑木を切り払って赤松の美しさがよく見えるようにしたのである。

ロンブルカジュラルミンカ

ロンブルというのはテントのことで、フランス語で蔭という意味だそうである。橋公園に一番はじめにロンブルを設置した時に岩切氏の面目躍如たる話がある。はじめ社内での意見では、このロンブルのテントに広告をとるということであった。そうすれば、広告収入でもってロンブル設置費が只になるという考えである。ところが岩切氏はそれを許さなかった。それでは宮崎交通という字だけでもとの意見が出たがそれもと上げなかった。そのうち台風が来てロンブルがとばされてしまった。皆の者は、こんどは頑丈なジュラルミン製のものにしようという出したが、岩切氏は早速もとのロンブルを作り直した。皆は不経済だと口々に言った。そこで岩切氏はロンブルにしななければならないわけを話した。日本人ぐら

い写真機をもって歩く国民はいない。その写真機がカラーになったのだから、赤と白、青と白のあのロンブルでなくては写真にならないのだ。また費用がかかるというが、コマーシャルを付けてないロンブルは、安心してテレビにもとってくれる。現にNHKのテレビに“たまゆら”というドラマが放映されて、橋公園のロンブルが何度出てきたことか。宣伝費に換算すれば大したもので、ロンブルを少々作り替えても十分引き合うのだと皆の者に説いたということである。

自然の美・人工の美・人情の美

岩切式修景デザインは、単に形而下の自然植生のみでなく、形而上的なものをひっくりめたほんとうのトータルデザインである。これは岩切氏の哲学的信念、仏教に深い信仰をもっていた母堂の影響によるものである。
岩切式修景デザインの素材は、美しい日向の自然である。南国の太陽、美しい海岸、澄んだ空気、それに豊かな植生。それに人工を加える。さきへのべた“植え足し”“切り出し”もその一つである。岩切氏が実験にうつす植生は、次から次へと実に貪欲なばかりである。これらの植生を群落の美としてまとめ、観光の拠点にする。サボテン公園も、えびの高原への沿道のコスモス原もそうである。

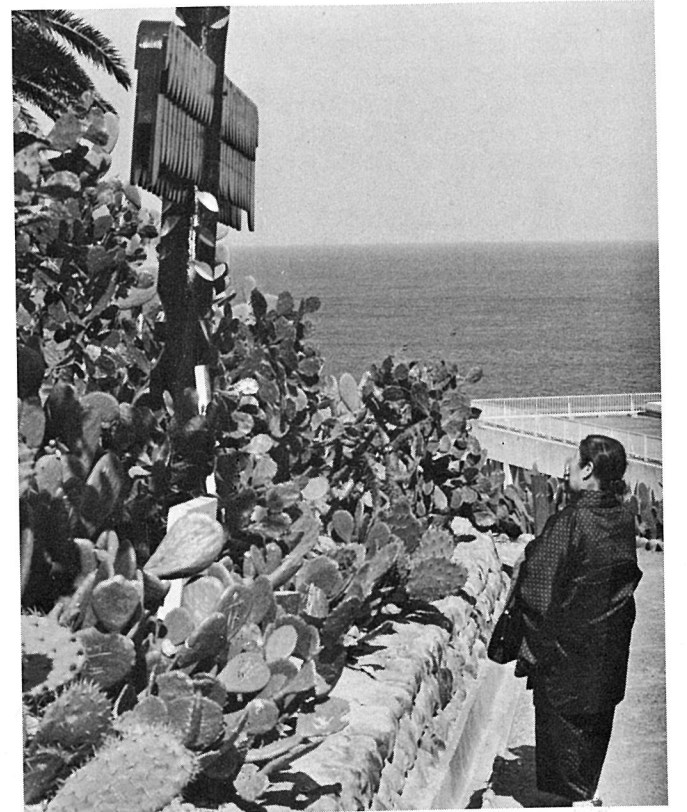


49 平和台公園の花壇（花の宮崎）

ロードパークというのが、岩切氏の主な考え方である。沿線の修景をして、道路を公園のように美しくするというのである。
ロードパークのところどころには、花の群落を作って見どころにする。ここでは日向の自然と、人工とが重なりあってより美しい風景を作り上げている。
さらにその上に、人情の美をつけ加える。一度宮崎観光に訪れた人達に、もう一度行きたくならせるような、こまやかな人情の美をここにつけ加えて、修景デザインも完璧になる。自然の美、人工の美、人情の美三拍子揃ったところを岩切氏は目標にしている。

ガードスティックと並木の額縁

岩切氏のロードパーク・デザインの手法にガードスティックがある。これは短い杭で頂点を斜に切って、上を白く周囲を黒くぬってある。これがロードパークの沿道にずっと並んでいる。ガードレールとガードロープは建設省で作るが、ガードスティックはみんな宮崎交通の会社で作っている。空地があるとすぐ借りるかそれを買わしてガードスティックを立て芝をはって木を植えると立派な景色になる。それをほおっておくと、そこに土産品店ができてすっかり景色がダメになる。全国いたるところの観光地で景色がこわされている例は数限りなく見受けられるが、ガードスティックは景観をガード



50 日南・サボテン公園

している。また、並木が、風景にもつ効用をもっと重視すべきだと岩切氏は力説する。並木は歩く人のための木蔭という役目の外にもう一つ景色をみつめるための額縁という役目を果している。しかもこちらが動くたびに動くから動く額縁という実にすばらしい役目をしている。従ってなにもない所には植えなくてはいけないし、路傍にある大きな木は切ってはいけない。そうすることによって本当に良い景色ができ上るといのである。

フェニックスの宮崎

岩切氏が観光宮崎をデビューさせるにあたってのコンセプトは、「三千年の建国の歴史」と「南国の情緒」であった。「南国の情緒」を押し出すのに、はじめ青島のびろう樹とフェニックスが考えられたが、生長の早いフェニックスが採用された。そうしてフェニックス群落の見せ場を四つ設定した。一つは日南海岸のフェニックスで、これは海を背景としたフェニックスの景色である。第二は橋公園のフェニックスで、これは川畔の景観としてのフェニックス。第三はこどものくにで、これはフェニックスの林としての景色。今一つは青島駅前通りのフェニックスでこれは並木としてのフェニックスである。

国・県との三者協定

岩切氏は、日南海岸国定公園ロードパーク完成のために、宮崎交通が進んで、国及び県との協定を結ぶことを推進しこれを実現した。道路の管理補修や、自然景観保持のための行政指導は国や県の担当するところであるが、沿道の修景及び清掃については宮崎交通が自己の負担においてすすんでこれにあたるという内容のもので、他に例を見ない協定である。
これは、岩切氏が宮崎県の経済界、政界において有する実力を背景にしてはじめてなし得たものであるとともに、かけがえのない日本の自然を保全し、あるべき観光修景の姿を示す岩切氏の祈りのあらわれである。若き日、岩切章太郎氏は南フランスに旅し、紺碧の地中海の岸に、ミモザの黄色い花の咲きつづいている風景の魅力的な印象が忘れられなかった。その印象は結晶して、日南海岸ロードパークとなって実現した。経済人でありながら、最もヒューマンな修景デザイナーとしても超一流の人である。
修景の中の公共施設も、景観をこわさないようこまかく配慮される。例えば、こどものくにの屑籠は、三分の二まで地下に埋設されている。えびの高原は夜の散策がすばらしいが、照明灯は全部地下埋設にしている。広い高原の広場から邪魔になる電線をなくすることは容易でないが、岩切氏はどうしてもそうして美しさを求めずにはいられないのである。（リポーター大平恵一）